

【史料紹介】 安房妙本寺所蔵「富山一流草案」

The Draft of Fusan-ichiryu, Housed at Myohonji Main Temple of Awa

佐藤 博信

SATO, HIRONOBU

要旨 ここで紹介する史料は、文龜三年（一五〇三）七月二十五日に安房妙本寺の住職日要から「富山一流草案」を伝授された本寿坊日果が天文二年（一五三三）七月七日に六位公日鎮に書写・授与したものである。妙本寺に伝来する日果自筆本からの翻刻である。

【解題】

中谷山妙本寺は、千葉県安房郡鋸南町吉浜字中谷に所在する日蓮宗寺院である。ただ日蓮宗寺院とはいっても、宗祖日蓮本弟子六人（六老僧）の一人日興を開祖とする富士（日興）門流の寺院である。開山は日興―日目と連なる日郷、開基は佐々宇左衛門尉で、その起源を鎌倉時代末期に持つ県内屈指の古刹である（佐藤『中世東国日蓮宗寺院の研究』東京大学出版会、二〇〇三年十一月・佐藤『安房妙本寺日我一代記』思文閣出版、二〇〇七年一〇月）。しかも、その歴史と由緒を示すが如く、日蓮・日興・日郷以下歴代住職（「上人」の曼荼羅本尊、十五巻本「妙本寺文書」以下の中世文書、膨大な聖教類が僧俗一体で格護されている。

このうち、中世文書に限っては『千葉県の歴史資料編中世3（県内文書2）』（二〇〇一年三月）にほぼ収録され一般に供されたが、

聖教類については従来堀日亨編『富士宗学要集』・『富士学林教科書研究教学書』に部分的に収録されたにすぎず、一般には必ずしも周知な史料とはいえないのが実情である。昨今聖教類が奥書を中心に貴重な史料として再評価されている点からも、より厳密な校訂を踏まえた紹介が必要とされる所以である。

ここでは、前回（本誌前号掲載）の安房妙本寺所蔵「宗祖一期略記 日我御記」に引き続き安房妙本寺所蔵「富山一流草案」（以下、本書と略す）を紹介したい。本書自体は、これまで数回にわたって紹介されている。最初に紹介したのは、『富士学林教科書研究教学書第三十巻』（富士学林、一九七一年五月）である。これは、堀日亨師の書写本（影印）の紹介である。その奥書には、「依妙本寺蔵日果奥書之本書写之、但一角朽損字体不明処不少、須更他本校正之也、明治四十一年（一九〇八）五月 雪山日亨」及び「昭和四年（一九二九）十二月廿九日再校大得正、旧校近為定本乎 日亨（花押）」とみえ、妙本寺本から翻刻したことがわかる。これは、最近

興風談所の「日興門流史料システム」にも収録され一般に閲覧可能となった。

次いで立正大学図書館が平成元年(一九八九)七月に「撮影」した「富士門流口伝草案(日要述 日蓮宗学全書刊行会 写)」とされるものである。「日蓮宗学全書刊行会蒐集本」の判が捺されているが、その典拠本は不明である。しかも、日杲奥書もみられず、日要の本文のみである。写本も見取り写しである。その意味で、善本とはみなしえない。

そして、先述の『千葉県歴史資料編中世3(県内文書2)』である。これは、江戸時代末期に伊豆宇佐見村行蓮寺十三代日全(佐藤「伊豆参詣記―宗祖日蓮の聖跡を訪ねて―」『鎌倉』一〇二号、二〇〇六年十二月)が書写した安房妙本寺所蔵「我邦雜記」(「草案日要」を含む写本)からの紹介である。これには、本奥書として「御正本日州本蓮寺アリ 妙本寺日我(花押) 本蓮寺日円ヨリ伝授 学頭坊相承日杲ヨリ免許」とみえ、現宮崎県児湯郡新富町所在の本蓮寺(佐藤「日向参詣記―安房妙本寺の旧末寺を訪ねて―」『千葉大学人文研究』三十六号、二〇〇七年三月)に「御正本」が存在したという。これは、年代的に「草案 日要」を指すと思われるが、それ自体が日要の自筆本であったか否は不明で、むしろ写本であった可能性が高いと思われる。

この度、以上の三本の写本とこれから紹介する日杲自筆本とを照合したところそれなりに異同が確認され、三本とも必ずしも厳密な書写・校訂を踏まえたものとは言い難いことが判明した。より原本に近い本書をここに紹介する所以である。

さて、この「草案」を纏めた日要(俗姓中村氏)は、永享八年(一四三六)日向細島(宮崎県日向市細島)で生れた。長享元年(二年

とも。一四八七か一四八八)に日朝から学頭坊を相続し、延徳元年(二四八九)に日信の跡を受けて妙本寺住職となった。明応から文亀年代にかけては、日向細島の本要寺(現存せず)に在住し、文亀二年(一五〇二)八月に本寿坊日杲に学頭坊を譲り、またその前後に日清に妙本寺住職を譲り渡しており、故地で隠居する予定であった。しかし、日清が文亀三年正月十八日に死去したために、住職に復し安房に戻った。永正十一年(一五一四)十一月十六日に上総下沢(千葉県富津市)の妙勝寺(現存せず)で死去した。

日要は、妙本寺の歴史のうえで開山日郷・中興の祖日要・再建の日我の一人として特別な位置を占めている。そのうえ、天台教学から御書講義への転換を通じて富士門流でいち早く妙本寺教学を確立せしめた人物であった。それ以前来の御書編纂を踏まえて可能であったのである。その点で、執行海秀『日蓮宗教学史』(平楽寺書店、一九九六年三月)にも、日要は独立立項されているが、大石寺日有との関係や尼ヶ崎教学(日隆門流)の影響などに関する記述は、再検討の必要があるかと思われる。日要は本書以外にも「日要愚案」・「当家口伝草案」・「一代大意抄見聞」・「五人所破抄聞書」・「法華本門開目抄聞書」などの多くの著作を残しているが、自筆本は永正八年六月十三日付「日要愚案」(「定善寺文書」)のみである。その意味では、弟子日杲の筆にして年代明記の本書の価値は低くない。なお、本書の解説には、大黒喜道編著『日興門流上代事典』(興風談所、二〇〇〇年一月)がある。

ところで、この「草案」は、本奥書にある様に文亀三年(一五〇三)七月二十五日に日要から本寿坊日杲並びに弟子中に授与されたものである。署判には、「妙本寺 日要(花押)六十八才」とあったと思われる。日要から学頭坊を譲られた日杲は「当家法門於九州、



写真1 日杲「富山一流草案」奥書



写真2 日杲伝授状

日要弟子分中第一」と称された人物で、この他多くの聖教の伝授や切紙相承を受けている。それがさらに日我に伝授・相承されたことが「妙本寺文書」からも窺われる。

そして、この「草案」の日要自筆本（現存せず）を伝授された日杲がこんどは天文二年（一五三三）七月七日に六位公（阿闍梨）日鎮に書写・授与したのである。それが本書である。その奥書（写真1）に「于時天文二年^{癸巳}七月七日積年六十六 学頭坊日杲（花押）」

とみえる通りである。本書は、学頭坊日杲の自筆本（十六帖）である。表紙の「重本 富山一流草案 日要述記」も、日杲の自筆とみられる。妙本寺衆六位公日鎮・繼巡房日応が「日我は佛法御迷乱」の時に妙本寺代官日我の指示で日向の日杲のもとに赴いた際、日杲が日鎮に相伝したのであった。日杲は、同日に「観心本尊抄・本因妙抄、其外御大事、何^茂従 日要上人日杲相承之分」（「妙本寺文書」一七〇）を日鎮に伝授・相伝している（写真2）。それらは、現在

残されていない。そこにも、「日州下向之時」とみえる。両本は、もちろん同筆である。また日杲は、その後の天文六年六月十五日にも日鎮の「二度目」の「日州へ下向」の際に日杲「五人所破抄聞書」を書写・相伝している。奥書は日杲の自筆であるが、本文には「右筆下野公」とある。特別な使命を担った両度に及ぶ「日州下向」に特別な配慮がなされた結果であった。これらの聖教は、日杲の信心根本の在り方を示すものとして相伝されたに違いない。

この「日は仏法御迷乱」云々の奥書は、妙本寺の歴史にあつて妙本寺住職日我成立の前提となつた日杲の「御迷乱」を伝える貴重な史料として注目されてきた。こうした日杲の努力で日杲によつてもたらされた妙本寺(日郷)門流の化儀秘決の混乱が正され、日我がその代官・後継者として赴任し再建に取りかかつたのであつた。その意味で、日杲は、日我擁立の最大の立役者であつた。日杲は、天文十三年(一五四四)二月二十五日に七十七歳で死去している(「妙本寺年中行事」)。その十三回忌の際の石塔が日向本永寺跡墓地に伝存している(『宮崎県題目石塔調査レポート』興風談所、一九九九年六月)。

そもそも、本書は、日杲から日鎮に伝授されたものである。それが妙本寺にもたらされ現在に至つたのである。日鎮は、六位公・新大夫・法泉坊ともいわれた日杲・日杲の有力弟子であつた。日杲の指示を受けて妙本寺にあがつた日我を支えるべく活躍した人物である。妙本寺の末寺妙顕寺の住職ともなつた関係で、その関係史料として妙本寺にあがつたものと思われる。先述の日杲「五人所破抄聞書」には、「納妙本寺 法泉坊ノ本也、日我(花押)」とあり、日鎮のものが日我をへて妙本寺に納められた様子が窺われる。日鎮関係史料が妙本寺に伝来した理由には、こうした事情が存在したのであ

る。現在匡真寺(神奈川県川崎市麻生区)に所蔵される日鎮宛日我授大聖人事・日我置文も、妙本寺から流失したものを昭和十五年(一九四〇)に片山日幹師が購入したものである。ただ日鎮関係文書(妙本寺文書)「定善寺文書」「匡真寺文書」には、なお検討の余地があるものが含まれている。

なお、本書の紹介に際しては、いつもながら妙本寺学頭鎌倉日誠師の御教示と御配慮を頂いた。また興風談所坂井法暉師からも種々御配慮を頂いた。写真版の掲載に際しては、鎌倉日誠師の御許可を頂いたうえで千葉県史料研究財団所蔵のものを利用して頂いた。併せ記し拝謝す。

【本文】

草案

富山日杲述記

夫以、顕本遠寿之妙風者吹弘伽耶始成之迹執、久遠寿量之恵日者照タマヘリ後五百才之長闇、幸哉、我等過テ在世正像受生末法当今、奉値本門最要之秘法事、歡喜充□(遍)身心生大喜悦ナルヘシ、不可信、不可仰、凡本門法花宗者、本因妙□(為)□(宗)極、名字即ヲ定タリ行位ト、其本因妙□(者)、□(久)遠実成ノ釈迦如来並二十方三世諸□(仏)菩薩於テ最初凡夫地、此ノ妙法蓮華経ヲ信シ始メ玉ヒシ本地真因ノ位也、以テ此久遠元初之信心ヲ、忝モ移シ末法今時惡世惡人ノ時機、師弟共ニ三毒強盛ノ愚迷ニ令玉フ口唱本門秘要ノ大法妙法蓮華経ヲ事、併ラ令然時故也、経ニ後五百才中広宣流布ト説キ、大師内鑑ノ尺ニ後五百才遠潤妙道ト尺シ、末法之初冥利不無トモ判シ

高祖師ノ従迹門本門ハ撰下機ヲ教弥受位弥時下ノ六字可留心被遊此

意也、然間、当宗ノ信者行者ハ道俗貴賤共ニ色心ノ二法ヲ納メ置
過去久遠ニ、不知不覺ナ□□(カラ)□□無二ノ信心ニ、無ク他
念奉唱南無妙法□□□(蓮華經)□(者)、凡身即仏身ニシテ是
人於仏道決□(定)□(無)疑ノ名字不退ノ即身成仏ヲ成就□□、
經云我本行菩薩道、乃至所成壽命今猶未盡說キ、大師ノ尺ニ本門
以テ本因為元始ト尺シ、或壹念信解者即是本門立願之首トモ判シ
高祖大聖ノ御定判ニ、釈迦如来ノ五百塵点ノ当初凡夫ノ御時トモ、
或ハ彼ノ不輕菩薩ハ初隨喜ノ人

日蓮ハ名字ノ凡夫也ト、諸御抄ニ不輕ノ跡ヲ詔繼スト在々処々被
遊候ハ、此ノ本因妙名字即ノ事也、染心符奉拝見者也、殊更本門
宗ノ觀心ト者、以テ堅固之信力住シ大慈大悲ニ、十界皆成十界久
遠ト廻向スルヲ名ル本門事行ノ觀心ト也、就中若シ人耽リ世間ノ
名利ニ、□諸人ノ風流ニ、此ノ一念之信心渡ルニ途□(事)在之
者、是即元品無明ノ根源輪廻生死ノ因縁可得心者也、当家第三法
門ト者、師弟共ニ住シ久遠因形ノ信心ニ、不移迹中ノ化儀化法ニ、
師弟同聲ノ口唱ニ懸心、無余念題目要行ノ折伏ノ弘通、不輕ノ往
昔ヲ移シ、勸持告勅ノ明文可有其人ニ也、富山門人ハ本迹約身約
位ノ尺ト、久遠名字ノ本門ヲ為本、今日熟脫ノ本迹二門ヲ為迹ト、
相承シ玉ヘル御秘伝ヲ不シ忘者、本迹ノ法門開山以來ノ御立行ニ
不可違也、於テ此□(重)ノ法門ニ迹中ノ応仏ヲ造立スヘキ耶ノ
事、今日熟脫ノ本迹二經ヲ誦スヘキ耶否ヤノ事更以不可及諍論
者也、但シ道心堅固ニシテ志アラン在好士者、遂談合ヲ事自他ノ
本望タルヘシ、理不尽ノ問答、無用ノ雜論等□(者)非仏法之本
意ニ、能々此旨ヲ可得心□(也)、願ハ富山門葉○捨我慢偏執ヲ、
抛テ名聞名利ヲ奉リ祈仏天、嘆キ宿習厚薄ヲ奉拝諸御抄ヲ者、争
カ現当ノ信心ヲ不成就耶、

一以テ次ヲ引來ス、若シ人來テ本迹ノ同異勝劣一致ノ法門ヲ問シ時、
先ツ反詰シテ云、本迹ノ同異者、台當兩宗上古ヨリ異儀有ル法門
也、殊ニ当宗ノ所詮不可過之也、乍去本迹ノ名言數量万多ニシテ
不一准、雖然任字(宗)旨ノ本意ニ大綱不過兩重ニ、其二重ノ本
迹ト者、久遠元初ノ本迹ト一代応仏ノ本迹也、何ノ重ニ於テ勝劣
一致ヲ可論談耶ト可答、
又大聖出世ノ御本意ハ此ノ兩重本迹ノ中ニハ何レノ本迹ヲ御依用候
ヤト尋ヘシ、

又重テサテ勝劣一致ノ中ニハ何レヲ御□□(修行)候ヤト問シ事在
者、其時ハ付テ御問難□(本)迹ノ正躰ヲ定テ勝劣一致ノ法門ヲ
落居申サン為也ト可反詰、問答ハ四種ノ答アレ共、反詰ヲ以テ為
所詮、他ノ不審ヲ其ママ請取事、問答未徹ノ事也、能々可習之、
一權實ノ問答ノ時ハ、何宗也トモ先以テ三説超過ノ經文ヲ正意トシ
テ尋問ヘシ、一代ノ仏經宗々ノ依經速也ト云トモ、三説ノ外ヲハ
不可出、殊ニ真言宗ナント別仏ノ說法ナント申成ス事多シ、取
ツメテ三説ヲ以テ可落居、委細ハ真言見聞抄ヲ奉拝見、如御本意
問答スヘキ也、何ノ宗何ノ門流問答ノ時モ本意ヲ沙汰スル誠ニ以
テ叶フ冥過(加)者也、知恵才覚立テラシテ無用ノ雜論却テ非仏
法ノ本意ニ、殊更当門流上代ヨリ堅ク止アル事也、当流ノ御法門
ハ本門至極ノ下種ノ要法ニテ五味ノ主シ、醍醐ノ正□(主)ハ誠
ニ三説ノ外超過ノ深法ナレハ過去本因妙名字即ノ本門立行ノ最初
ニテ世々番々諸仏菩薩ノ出世成道ノ根本、實ノ五味ノ主也、第三
ノ法門ニテ大聖開山過去ノ不輕菩薩ヨリ外ハ弘通シ給ハン秘法
也、連々ノ信心談合ノ時モ此存分申候ツル、返々モ閣万事ヲ偏ニ
諸御抄ヲ奉拝見、本迹權實ノ法門何モ可有落着者也、
日要案云、久遠元初ノ報仏ノ本迹ナラハ、本因妙ノ約身約位ノ根本

下種ノ名字即ノ立行ナレハ始終共ニ本迹勝劣ナルヘシ、

又一代応仏ノ上ノ本迹ナラハ、今日日本果妙ノ權実、約智約教ノ權実本迹ナレハ一致ノ重モ可有也、然者文義広転ニシテ轍ク難会法門也、志アラン人習学シテ可得心也、天台伝教ノ智者ノ判尺無量無辺也、雖然迹權本実ト尺ラレテ久遠本迹ニ□(非)□可得心事、当宗ノ信ノ一筋ナルヘキ重也、

一權実本迹共ニ三説ノ文肝要也、權実ノ重ノ三説超過ノ法門ハ漢土日本ニテ天台伝教ノ既ニ賢王ノ御前ニシテ決シ勝負ヲ玉フ事、現前ノ法門也、何モ両大師ノ問答、三説ノ文ヲ以テ諸宗ヲ責破シ玉フ也、

又本迹ノ問答モ三説超過ノ重本意タルヘキ也、其故ハ聊爾ナレ共、觀心本尊抄ニ重々ノ難信難解ヲ被遊、再往ノ重ニ本門独リ三説ノ外難信難解ノ正法也ト御定判アテ、迹門ヲモ三説ノ内ニ被遊事、誠以テ超過ノ重也、惣シテ上行所伝ノ要法ハ三世諸仏世々番々ノ御出世ニモ於諸教中秘之不傳ノ深法也、サテ五味ノ主トモ醍醐ノ正主トモ名ル也、仏々ノ五時五味ノ説教ハ皆以テ熟脱ノ教法ナル故也、諸御抄ノ中ニモ大田抄取要抄西山抄上野抄等染心肝ニ奉テ拝見、当家□(法)門ヲハ可得心也、常ノ法談ノ時モ広転ノ諸聖教、台家ノ法門等ヲハ習学シテ内智ニ持テ御抄ノ御意ヲ深ク信解シ、權実本迹共ニ大聖ノ被遊重ヲ心ニ懸テ弘通アラハ即經旨ニモ叶、本書ノ実義ニモ相当スヘキ也、惣シテ当宗ノ法談ハ種熟脱ノ三義ヲ□(簡)別シテ權実ノ法門モ約部ノ尺ヲ用テ可沙汰也、約教ノ尺ヲ弘通セハ、天台ノ止觀、權実一致ノ里(理)觀ナルヘシ、是皆諸御抄意也、殊以テ富山門流ハ過去ノ種ニ宗旨ヲ立ラレテ、本門下種ノ立行ニテ以テ信心ヲ事行ノ觀心ト名タリ、大師ノ尺ニ、自本処来三世益物故此三世皆屬過去ト判ル此意也、寿量品ノ失心

不失心ノ兩機皆名字即ト習定ル也、

四信五品抄法蓮抄等ノ過去ノ自我偈得道ト被遊、過去益物ト云モ末法下種ノ事也、難有御法門也、文殊ノ智惠富桜那ノ弁説ニテ致トモ法談ヲ、不相当諸御抄二者、説法利生何ノ有ニ得益力耶、

一日要云、一宗ノ學者多分当宗ノ本意ハ第三ノ法門也云々、自元御抄ニ被遊上者、勿論ノ重也、雖然只教相トノミ得テ心、即身成仏ノ事行觀心トハ無キ落着歟ト覺候、

当門流ノ信者ハ、久遠名字ノ妙法ヲ師弟一同ニ奉ヲ口唱名ケ事行ノ法躰ト、師弟同意ノ信心ヲ号シ事行ノ觀心ト也、是皆受持ノ一行ニ結歸スル也、經文ニ惡世末法時能持是經者ト被説、○以仏滅度後能持是經故諸仏皆歡喜現無量神力説キ、受持ノ行者ヲ應受持此經是人於仏道決定無有疑ト神力要付ノ結文也、此ノ行者ヲ能居ノ本尊ト定メ、所居国土ヲ常寂光土トモ名ル本門戒壇トモ也、但シ可待時ヲ見タリ、此等ノ經文ヲ本証ニ引玉ヘル事、諸御抄ノ深秘也、敢テ不可為他伝重ニテ候、

第三ノ教相ハ觀心ノ上ノ教相ニテ、一代聖教ノ主君ノ教相也、本門ヲ五味ノ主ト申ハ此法門事也、

一当門流ノ勤行ニ方便寿量ノ兩品ヲ読誦有ル事、上代ヨリノ儀式ニシテ開山上人重々ノ御義トモ更ニ不及料簡(簡)ニ、經文御抄ノ本抛分明ニ被遊候ヘトモ、末学末徹ノ故ニ不得其心ヲ、若シ大聖ノ御抄ニ不及拝見者、可待口伝者也、開目抄等ノ諸御抄ニ分明也、一末法當時ノ法華經ト者、広略要ノ中ニハ要ノ法華經也、本門流通永異諸部ト尺スル此意也、

高師(祖)大聖妙法蓮華經ノ五字者、非ス文ニ非義一部ノ意耳ト御定判有ル、此要ノ法○經ノ御事也、

又妙法蓮華經ハ世間ノ人ハ名ト思ヘリ、サニテハ候ハス、躰也、意

也、所詮也ト被遊、是モ要ノ法花経ノ事也云々、可秘ノ、方便
 寿量等ノ読誦皆要ノ助行也、此ノ筋ハ迹ノ文証ヲ借ル一分也、委
 細口伝可在之、

一本化上行菩薩ハ久遠元初ノ支分ノ御弟子、同躰ノ師弟、一身ノ因
 果ト者、此ノ本化ノ御事也、娑婆世界ノ一切衆生最初下種ノ本師、
 有縁ノ主師親也、殊ニ本朝ニ教弥実位弥下ノ本尊、斯人行世間能
 滅衆生闇ノ導師ニテ宿習深厚ノ大士ニテ、三国末弘之万法、能生
 種子ノ大慢荼羅、正像末弘ノ大本尊也、

御示云、仏滅後二千二百三十九年一圓浮提未曾有之本尊ト被遊タ
 ル、誰カ可疑、末法下種ノ教主、本因妙ノ大師、信謗彼此決定成
 菩提ノ大慈大悲也、

日蓮カ慈悲広大ナラハ此題目者万年ノ外未來ニテモ可流布、日本ニ
 渡テ仏法七百余年、未不聞不見妙法蓮華経ト我モ唱ヘ人ニモ勸タ
 ル智人ナシ、是ヲ以テ可推、月氏漢土一円浮提ニ肩ヲ並ル者ハ不
 可有御名乘玉ヘリ、難有主師親也、生疑不信者即当墮惡道ナルヘ
 シ、不信謗法可恐可慎、

右此ノ草案者、日要一期ノ信心ノ一分也、非他伝事ナレトモ於後
 代弟子等、無慈悲恨不便至極之間、載紙面ニ也、縦ヒ雖為弟子分
 名聞利養不信高慢之者ニ不可見也、若案立相当御抄ノ本儀者、尤
 可依用也、若又相違諸御抄者、愚老罪障消滅可吊事、三世之可為
 助成者也、此言若墮者将来可悲、先哲章案大師ノ非(悲)歎此事
 也、弟子分ノ中ニモ非起請文者、不及他見者也、誠惶誠恐可怖可
 信云々、

文龜三年^{癸亥}七月廿五日ノ草案本寿坊並ニ弟子等ノ中ニ所送也、有
 志者、伝授シテ不可及他見也、

妙本寺

日要□□(在判) 六十八才
 右此御草案者為^ハ定^ハ申御使筑紫

此草案者、日要上人御一期仰不殘御法門トテ日杲之所^江以御自筆
 本御相伝、正本者日杲所持也、房州妙本寺衆六位公日鎮・繼巡房日
 応 日は仏法御迷乱之時、日州末寺^江為使僧下向之砌、六位公^江致
 相伝処也、

于時天文二年^巳七月七日積年六十六
 学頭坊日杲(花押)

一地涌菩薩ヲハ釈尊自□□□□□□(性処生眷属)名ケ奉ル也、尚待
 本眷□(族)□□(菩薩)サタノ御事也、一仏二名ノ本尊□□(因
 果)円満ノ尊形也、末法応生ノ菩薩也、弥々可秘名目ヲ仕フ事大
 切也、

(さとう・ひろのぶ 本研究科教授)